子宮頸がんは、予防する方法があります。

未来を守るために、いま知っておきたいこと。

子宮頸がんについて詳しく紹介したホームページがあります。

「もっと守ろう.jp」では、子宮頸がんについての詳しい解説や、医療機関で予防ワクチンを接種するための具体的な方法などを詳しく紹介しています。

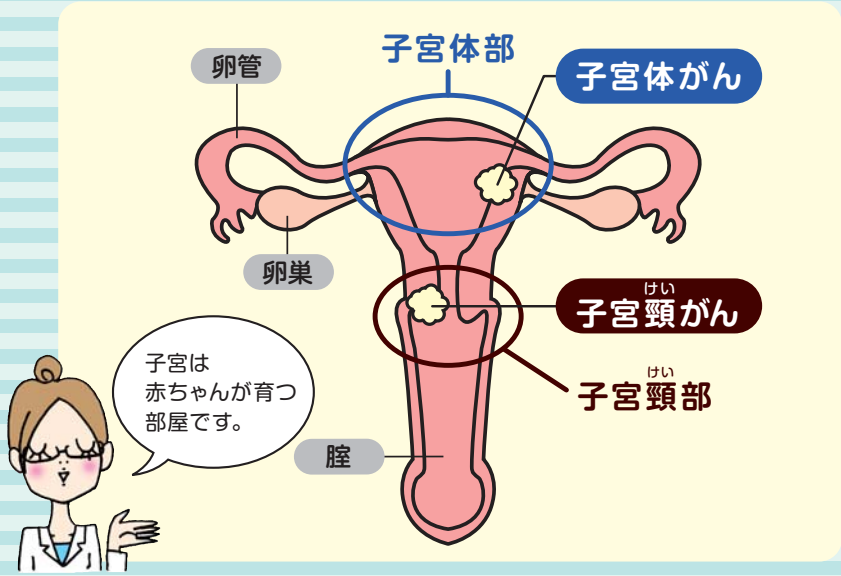
もっと守ろう.jp
http://www.shikyukeigan-yobo.jp/

監修：横浜市立大学医学部 産婦人科
教授 宮城 悦子 先生

MSD

2017年7月作成
GRD17PA007-0722

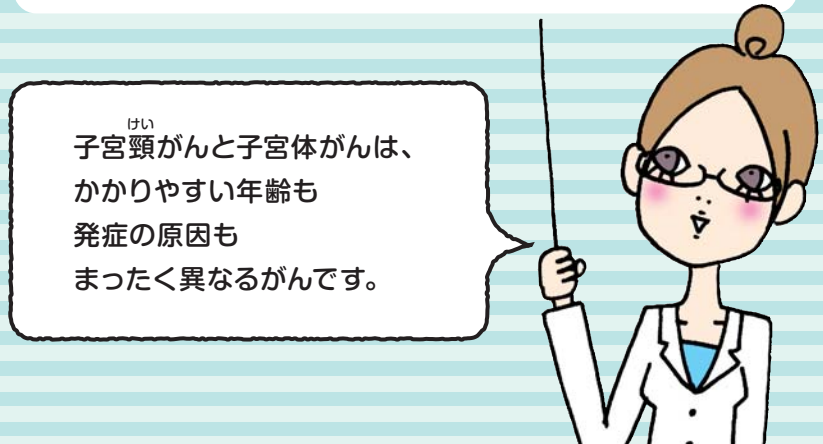
「子宮頸がん」は、子宮の入り口部分（頸部）にできるがんです。



子宮頸がんと子宮体がんの違い

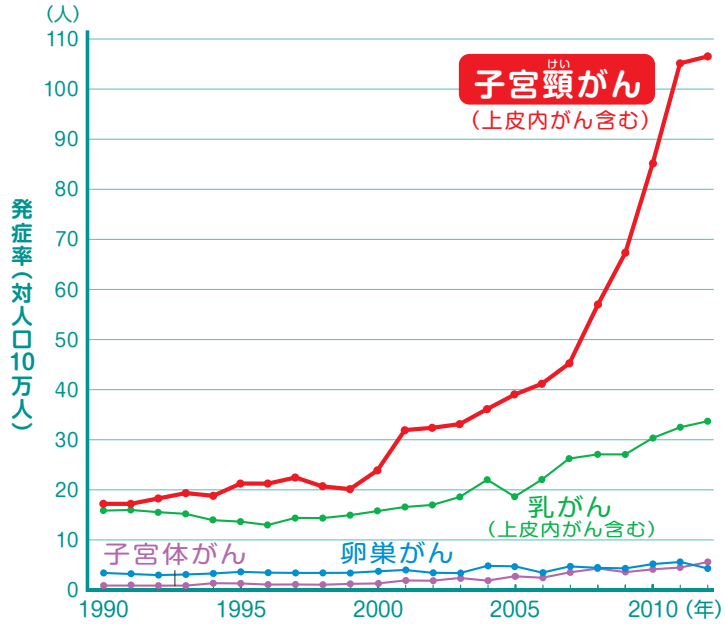
	子宮頸がん	子宮体がん（子宮内膜がん）
発生部位	子宮の入り口の子宮頸部	胎児を育てる子宮体部の内側にある子宮内膜
発症年齢	20代後半から多くなり、40代以降は横ばい。若い年齢（20～30代）で増えている。	40代から多くなり、50～60代の閉経前後で最も多くなる。
主な発生原因	ヒトパピローマウイルス（Human Papilloma Virus：HPV）の感染	エストロゲン（女性ホルモン）の長期的な刺激

国立がん研究センターがん対策情報センターがん情報サービス
一般の方向けサイト それぞれのがんの解説
子宮頸がん　http://ganjoho.jp/public/cancer/cervix_uteri/index.html
子宮体がん（子宮内膜がん）http://ganjoho.jp/public/cancer/corpus_uteri/index.html
厚生労働省 子宮頸がん予防ワクチンQ&A
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou28/qa_shikyukeigan_vaccine.html



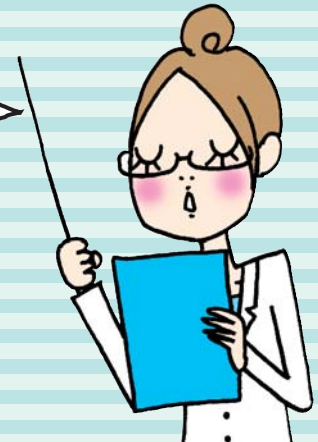
20〜30代の若い女性に子宮頸がんが増加しています。

女性特有のがん：発症状況（20〜30代）



国立がん研究センターがん対策情報センター 地域がん登録
全国推計によるがん罹患データ（1975年〜2012年）より作図

日本では、毎年約10,000人もの女性が新たに子宮頸がんと診断され、子宮頸がんが原因で約3,000人が亡くなっています[1)]。
そして、20代後半から30代という子宮頸がんの発症年齢と、出産年齢のピークが重なることが知られています。



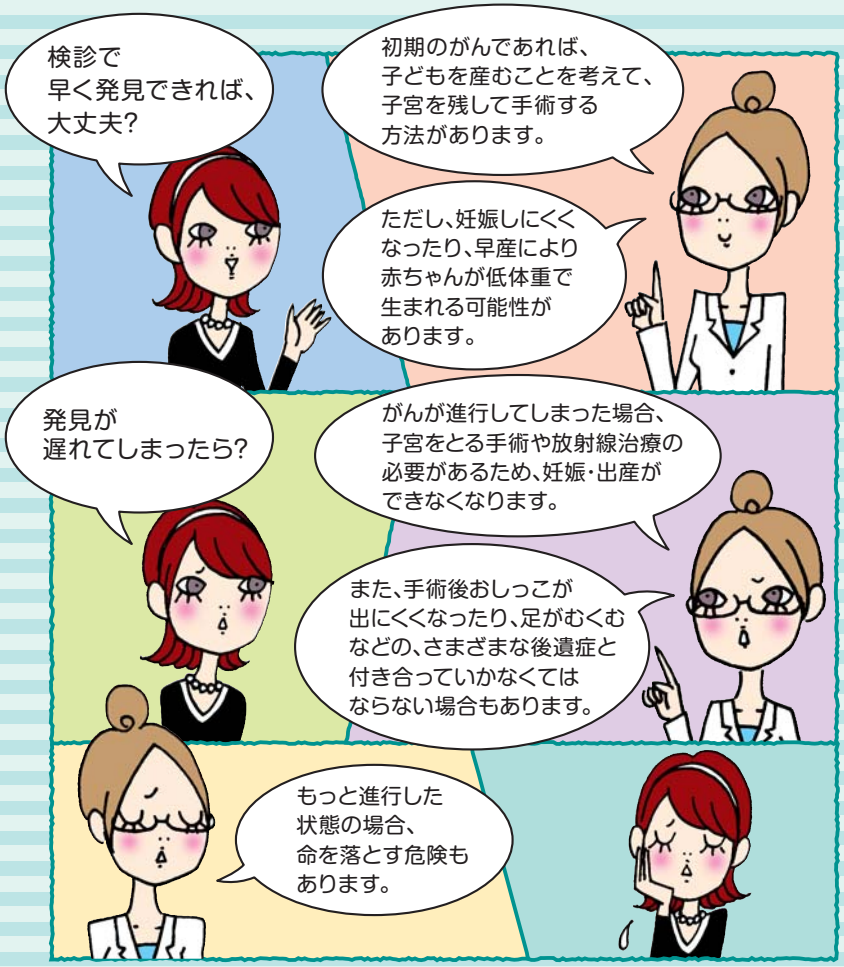
1）厚生労働省　子宮頸がん予防ワクチンQ&Aより

初期の子宮頸がんには ほとんど自覚症状がありません。

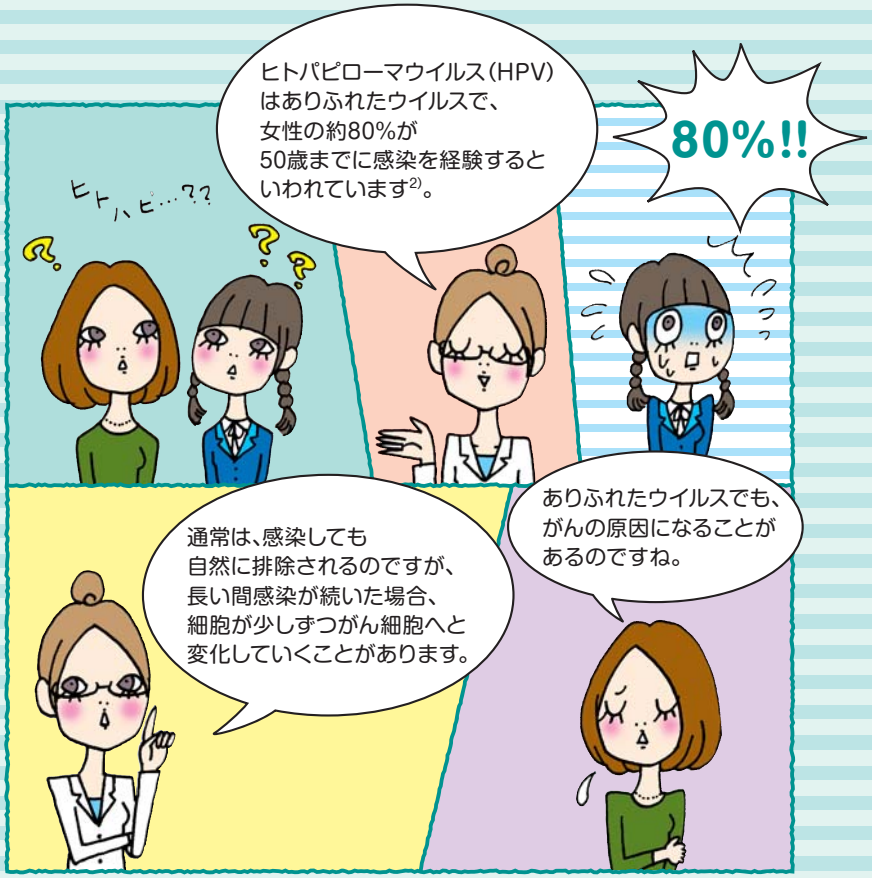
子宮頸がんが進行すると…

- 生理に関係のない出血がある
- 茶色のおりものが増える、悪臭を伴う
- 下腹部や腰が痛む

子宮頸がんになると、妊娠や出産に影響が出る可能性があります。



子宮頸がんの原因は、ヒトパピローマウイルス（HPV）です。



2）Markowitz LE et al. *MMWR Recomm Rep*. 2007 ; 56(RR-2) : 1-24.

ヒトパピローマウイルス（HPV）の種類について

子宮頸がんの原因になる可能性がある「高リスク型」と、皮膚や粘膜にできるイボの原因となる「低リスク型」があります。
また、HPVは、子宮頸がん以外のがんを引き起こすこともあります。

高リスク型

150種類以上の型があるHPVの中で、15種類程度が高リスク型です。子宮頸がんの原因となるHPVの代表は16型と18型で、子宮頸がんの原因の約65%を占めています。20～30代で発見される子宮頸がんでは、80～90%がこの16型、18型が原因です3)。

HPV16型

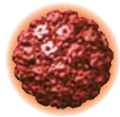
HPV18型

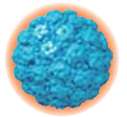
子宮頸がん以外の病気

外陰上皮内腫瘍
進行すると外陰がんになります。外陰がんは女性性器がんの約3%を占めています。

腟上皮内腫瘍
進行すると腟がんになります。腟がんは女性性器がんの約1%を占めています。

低リスク型


HPV6型


HPV11型

尖圭コンジローマ
- 良性のイボが性器や肛門のまわりにできる病気です。
- 痛みやかみゆなどの症状はほとんどなく、さまざまな形状のイボができます。
- 治療しても再発しやすいといわれています。

3）Onuki M. et al. *Cancer Sci*. 2009 ; 100(7) : 1312-1316.

子宮頸がんはワクチンで予防する方法もあります。

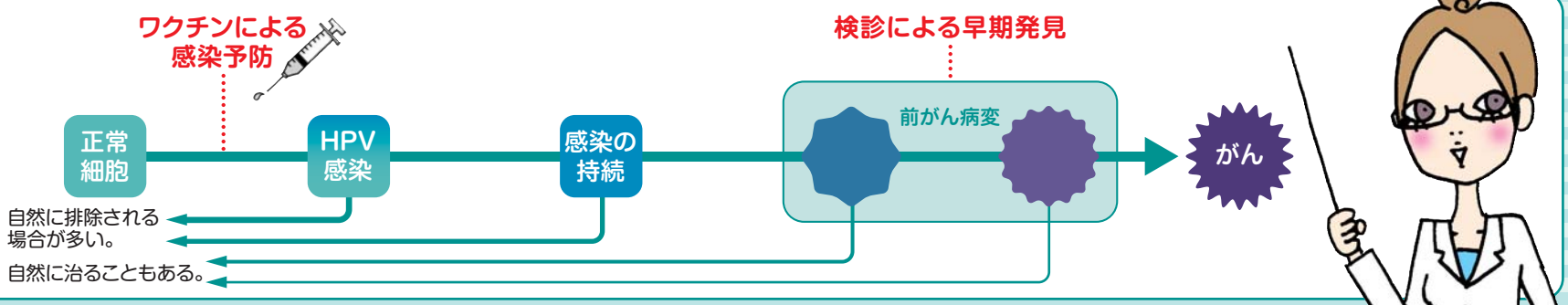
ワクチン接種と検診で子宮頸がんを予防しましょう。

子宮頸がん予防

子宮頸がん予防ワクチン（HPVワクチン）接種 ＋ **子宮頸がん検診**

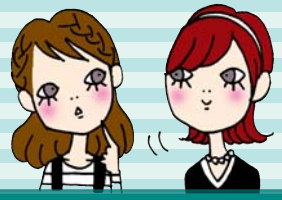
注）ワクチンを接種しても、すでに生じている病変を治療することはできません。

HPV感染からがんになるまで



定期接種の対象年齢
小学6年生から高校1年生までの女子

標準的な接種時期　中学1年生



ワクチンの接種スケジュール

同じワクチンを3回接種することが十分な予防効果を得るために必要です。必ず3回とも同じワクチンを接種してください。

ワクチン接種までの流れ

STEP 0

ワクチン接種の予約

病院を受診した時や電話で、医師やスタッフに相談してワクチン接種の申し込みをしましょう。その際、ワクチンを接種する意義と同時に副反応など分からないことがあれば、必ず医師等に相談しましょう。

STEP 1

病院についたら

注意事項を読んで、予診票に記入し、体温を測ります。

STEP 2

ワクチン接種

問診などを行ったあとワクチンを接種します。通常、座って腕または足の筋肉に注射しますが、ワクチン接種に慣れていない方は横になって打つこともできます。先生に相談しましょう。

STEP 3

ワクチン接種が済んだら

接種後30分程度は、病院で座って安静にします。ワクチン接種は3回ですから、次回の接種日を考えておくとよいでしょう。

ワクチン接種による、「失神・痛み」について知っておいてください。

失神について

注射の痛み、恐怖、興奮などの様々な刺激のために、心拍数や血圧が低下して、失神が起こることがあります。ワクチン接種による失神は思春期の女性に多いと言われていますから、注射への恐怖心が強い人は事前に医師にお伝えください。
失神による転倒やケガを防ぐため、接種後はすぐに帰宅せず、30分間は背もたれがあるイスなど、体重をあずけられるような場所にすわり、なるべく立ち上がることをさけて、安静にしていてください。診察室から移動するときには、看護師さんや保護者の方に付き添ってもらってください。通常は、横になって安静にするだけで回復します。

痛みについて

ワクチンを接種した後に、8割から9割の頻度で接種した部位が赤くなったり、腫れたりすることが報告されています。これは、ワクチンによって免疫が作られる時のからだの反応に伴うもので、ほとんどは数日で消失します。
また、頻度はまれですが、注射した場所以外にも、痛みやしびれ、脱力などが起こり、長くつづく場合には早めに医師等にご相談ください。
ワクチンを接種した後や、けがの後などに原因不明の痛みが続いたことがある方は接種について医師とよく相談してください。

子宮頸がん予防ワクチンのQ&A

Q なぜ3回接種するのですか。

A 十分な予防効果を得るためには3回の接種が必要です。なお、必ず3回とも同じワクチンを接種するようにしてください。

Q ワクチン接種と検診、両方受ける必要がありますか。

A 両方受けることが大切です。ワクチン接種の目的は、HPVへの感染を防いで、子宮頸がんの発症を予防することですが、100%予防ができるわけではありません。子宮頸がんを早期に発見するための検診も行う必要があります。ただし検診では見つかりにくい腺がんが増えています。ワクチンは腺がんも予防できますから、ワクチン接種と検診の両方を受けることが大切です。

Q 定期接種の対象年齢を過ぎてしまったのですが、接種は可能ですか。

A 可能です。ただし、任意（自費）での接種になります。医師にご相談ください。

Q ワクチンの副反応が心配です。

A ワクチンを接種した後に、8割から9割の頻度で注射した部位がはれたり痛むことが報告されています。これは、体の中でウイルス感染を防御する仕組みを作るために起こる症状で、通常は数日間程度で治まります。

主な副反応

頻度 10%以上	注射部位の痛み・赤み・腫れ
頻度 1～10%未満	発熱、注射部位のかゆみ・出血・不快感、頭痛
頻度 1%未満	注射部位のしこり、手足の痛み、筋肉が硬くなる、下痢、腹痛、白血球数増加
頻度不明	無力症、寒気、疲労、倦怠感、血腫、失神、浮動性めまい、関節痛、筋肉痛、おう吐、吐き気、リンパ節症、蜂巣炎

重い副反応として、まれに、アナフィラキシー反応などの過敏症反応、ギラン・バレー症候群、血小板減少性紫斑病、急性散在性脳脊髄炎などが現れることがあります。

万が一、注射した場所にかぎらず、痛みやしびれ、脱力などが起こり、長くつづく場合には医師にご相談ください。

子宮頸がん予防ワクチンのQ&A

Q ワクチンは子宮頸がんの原因になるHPVのうち、2つの型しか予防できないと聞いたのですが。

A ワクチンで予防できる子宮頸がんの原因HPV型は、16型と18型の2つです。日本での子宮頸がんの約65%は、16型、18型が原因です。特に、20～30代では、子宮頸がんの80～90%は16型または18型が原因です。16型、18型しか予防できなくても、若い女性の子宮頸がんの80～90%を予防できると期待されています。

Q 筋肉内注射は痛いと聞きますが。

A 接種方法に関わらず、一般的にワクチン接種時に痛みを感じることはありますが、ほとんどは数日で消失します。なお、接種部位の痛みや腫れなどの反応は、皮下注射と比べると筋肉内注射は少ないと考えられています。

世界各国で使用実績があります。

子宮頸がんが、ワクチン接種と定期検診により予防できるようになったいま、小児へのワクチン接種プログラムは、世界保健機関（WHO）でも勧められており、各国の政府が中心となって、世界中でワクチン接種が実施されています。